

鼎

談



志波 徹 (Toru Shiba)  
大阪ガス(株) エネルギー・  
文化研究所 主席研究員



当麻 潔 (Kiyoshi Touma)  
大阪ガス(株) エネルギー・  
文化研究所 主席研究員



奥本大三郎 (Daisaburo Okumoto)  
フランス文学者、作家、  
虫の詩人の館館長



# いのちと暮らしを支える 生命のにぎわい

画一的な都市化の進展の中で、これまで次々と失われてきた身近な自然。その価値を再び見直しながら、日々の暮らしの視点から生物多様性の大切さを考えたい。

無類の虫好きとして知られ、現在『ファーブル昆虫記』の全訳に取り組むフランス文学者・奥本大三郎氏は、機会あるごとに身近な自然の再生を訴えている。今回、自宅を改築して設立された「虫の詩人の館」(東京・千駄木)を訪問し、人間が暮らしの中で生命のにぎわいを感じながら暮らすことの意味や、生物多様性の保全につながる生活のあり方などについてお話をうかがった。



生きものとのふれあいからから  
得られる大きな恵み



当麻 本誌の今回の特集では、私たちの日々の暮らしを支える生きものという視点から「生物多様性」を考えてみたいと思います。今年は国連が定める生物多様性年で、10月には名古屋で生物多様性条約のCOP10が開催されるのですが、生物多様性という言葉についても、国内にはまだそれほど認知されていないというのが現状です。まず、私たちは生物多様性をどのように理解していけばいいのかということから、お話しただけたらと思います。

**奥本** 生物多様性を考える際に、まず外国と日本の農地利用を比較してみますと、たとえば西洋型の牧畜では一面が牧草地ですし、コムギ、トウモロコシ、ブドウ栽培などでも丘陵一面を畑にしています。一見美しいけれど、ああした画一的な農業の形態は、日本の里山や水田に比べて自然をより搾取するものとも言えます。その点では、水をたくさん溜める水田や循環していく日本の里山には生物が多様に生存在しています。ところが、日本でも今はそうした里山がない。ごくあたりまえだった雑木林も身近なところになくなってきています。

**当麻** その意味では、里山がもつ価値をもう一度見直す必要がありますね。

**奥本** 農業とうまく調和していた時代の自然ですね。薪炭林というのがあって、クスギやコナラを植えて、薪を伐って炭を焼いた。いいサイクルだったんですね。関東でも、源平合戦の時代の武蔵野は、もともと一面の茅ガ原かきだったそうです。そこに落葉性の広葉樹を植え、風景を変えていった。近世の日本人の生活は里山にあったということですね。小学唱歌に歌われる世界。

**志波** 里山の循環が途切れてしまっているのが現状ですね。今は農地も整備されていますし、道路はもちろん舗装され、あちこちコンクリートで固めることが多くなってきて、生きものも棲みにくいですね。

**奥本** 本来、日本の自然は強いんですよ。ゴルフ場でも、放っておいたら、すぐ疎林になります。それは、雨量と日照がちょうどいいということですね。こんなに荒らしても、また蘇ってくる自然というのは、他の国にはなかなかないんじゃないですか。日本の非常に恵まれた自然の強さを知って大事にすれば、失ったものを蘇らせることも可能だと思いますし、自然が復活すると、人々や子どもたちの心も守れるような気がします。

**当麻** その時代の人間の精神と自然は、向かい合わせのものかもしれないですね。そうした自然からの恵みをちゃん



貴重な昆虫標本が並ぶ「虫の詩人の館」の展示スペース

と子どもたちに伝えていくことが本当に大切だと思います。

**奥本** 水田にゲンゴロウとかトンボとかが発生しますよね。まずはトンボ捕り。赤トンボくらいだと幼稚園児でも捕れるんですが、ギンヤンマは2、3年生にならないと難しい。駆け引きもあってね。メスを捕ってきて、オスをおびき寄せたりもします。ああいうのは知恵の発達と関係がある。ガキ大将から伝授されるわけですが、見習い時代には、年長者と接する時に口のきき方とか人間関係も学ぶ。音感と味覚と言葉の感覚、対人関係、そういうものは小さい時に発達するもので、大人になってからでは遅い。5歳から10代の初め頃に育つんです。自然に対する感覚も、その頃にできてしまうと思います。

**志波** 大阪ガスにはNEXT21という実験集合住宅があります。大阪の都心ですが、いろんな木が植えてあって、夏にはクマゼミがやかましい。子どもたちも夏休みには朝からセミ捕りで一生懸命になって、虫かごが一杯になるまで捕っています。こんなに捕ってどうするんだと思うけれど、楽しそうにやっている。

**奥本** そうですか。この付近では公園にセミが鳴いていても、誰も捕ってないんですよ。やはり虫捕りも文化ですね。

**当麻** 身近にセミが鳴いていたり、トンボが飛んでいたら、捕りたいと思う子もいるでしょうが、教えてくれる大人と一緒にやれる友達がいなかったら、なかなか一人ではできないですね。

**奥本** それもあって、夏にはこの「虫の詩人の館」のイベントなどで、子どもたちと「地獄網」というのを針金でつくるんです。枝に止まっているセミの方に、網を下から持って行くと勝手に飛び込んできます。一緒にセミ捕りをする。そこで子どもの人間関係も育っていくんですね。

**当麻** この「虫の詩人の館」は昆虫好きの人には本当に楽しい場所ですね。ファールブルに関する資料が集められていますし、奥本先生が収集されたさまざまな標本もある。

**奥本** 昆虫標本制作教室なんかもやっているんですが、子どもの常連もいて、「こんにちは！」と元気よくやってきます。この道に引きずり込むのがいいのかどうかわかりませんが、夏休みの大人に、自然が好きになったきっかけをきくと、夏休みの標本作りだと答える人が多い。ところが今は、昆虫採集は可哀相だという。でも殺生はある意味でしようがないんです。人間も生きものの一種であるし、肉を食べたり、魚を食べたりするのは同じで、人間が生きていく上でいろんな局面で生きものを殺している。昆虫も鳥の餌になったり、死んでバクテリアに分解されるというのも自然の法則ですからね。

**当麻** そういう意味では、昆虫採集をやっていると、生と死を知り、いろんな虫の生態を自分で発見できますね。

**奥本** そう。虫を発見しようとする気持ちがあると、目が違ってきます。葉を裏返したり、木を揺すってみたり。ともかく、ものを見る目が発達するでしょう。逃げようとする生きものを捕まえる工夫をする。捕まえたものを標本にしたり、調べたりする。これが科学への第一歩でもあるんです。

## 多様な生きものとともにあった

### 日本人の暮らし



**当麻** ファーブルは欧米におけるよりも日本の方でよく知られているとお聞きしましたが、虫を徹底的に観察する研究法は、日本人に合っている面もありそうですね。

**奥本** そうなんです。昔から日本の絵画には、まるで接写レンズで見るとように描いた小さな虫の模写なんかがあるんですが、ヨーロッパの絵画には19世紀の博物画まで、そういうのはほとんどありません。日本にファーブル好きが多いのも、そういう文化とも関連している



思いますね。日本人の虫を見るような目が、うまくいくと精密な技術やIT産業にもつながる。悪くいくと、穴やキズがひとつもない野菜を求めたり、ゴルフ場の芝生でも徹底的に整えてしまおう方向に向かう。

**志波** そういうところにも画一化の傾向が出ているのでしょうか。先生ご自身は、子どもの時から昆虫がお好きだったのですか。

**奥本** 田んぼの真ん中で育ちましたからね。知人の動物学者などに話を聞くと、ほとんど全員、物心ついたときから昆虫が好きだったと言いますね。子どもを2つに分けると、生きもの好きか、機械好きに分かれるのだそうです。機械に興味がある子はラジオを分解したり、時計を分解したりするように。私は生きものが好きでした。

**当麻** 都会に住んでいると、なかなか自然に触れる機会が少なくながちです。

**奥本** ただ、都会も捨てたもんじゃなくて、探せばいるんですね。東京周辺では新興住宅地でも近くに図書館があって、捕った虫について調べることができる。学術的なものと身近な自然、その両方の要素で育つのが、子どもにとってはいいのではないかと思います。ところが今は、公園に虫がいると、それだけで嫌う人が増えてきて、薬で排除しようとする。日本人は神経質で狭い心の持ち主になったと思えますね。

**志波** 最近は公園も防虫をしていますね。役所としてはそうした苦情にも対応し、また剪定もしないとけないようです。

**奥本** 苦言を言ってくる人に対応する。大学でもそうですよ。別に虫がいなくても、時期がくると薬をまく。予算をとっているのです。学校や公園でも、住宅の小さな庭でも、日本在来の植物を植えて欲しいですね。どんな狭いところでも虫は来ます。

**当麻** たたえ小さい面積の庭でも意味があるということですね。



**奥本** 葉っぱが1、2枚あれば虫が育つことはできません。昆虫はライフサイクルが早いし、身体も小さくて食べる量も少ないですから。

**志波** NEXT21は、屋上とか中庭にも雑木の林があつて、「それだけ緑地があると管理が大変でしょう」とよく言われますが、特に剪定はしてないんです。多少形は整っていないなくても、伸びすぎた枝や、外に出る可能性があるところは年に1回くらい伐つてやるとかですね。

**奥本** それでいいんですよ。植物の細かいところを見たり、虫をスケッチしたり、写真を撮ったりしていると気持ちがあくほくほくしますね。

**志波** そこに住む子どもで、虫や植物に興味を持って、学校で虫博士と呼ばれるようになった子がいます。身近に自然があるのはいいですね。

**奥本** その子も、豊かな精神生活を送っていると思います。確かに今は総体的に言うといい時代だと思っんです。でも、幸せすぎてだめになることもたくさんあるわけです。道路はほとんど舗装されていますが、その途端に、ハンミョウから何か全部いなくなつてしまっています。護岸工事をする川はだめですね。生きものがいなくなる。護岸工事では、できるだけ川をまっすぐにして水を流す「水洗便所化」。そういうことが人間の精神にも起きていっているのではないかと考えると恐ろしくなりますね。

**当麻** 自然とのつきあいというところを忘れてしまった

生活。そうやって育つた子どもが親になつてくると、もともと知らないわけですから伝えることができない。

**奥本** 木切れを削つて何かの形にしたり、輪ゴムをつけるとパチンコになるとか、工夫してつくるのが楽しいですよ。すごいラジコンの自動車を与えられても、たぶん10分もすると飽きちゃう。それよりは自分でつくつた模型飛行機の方が楽しめるわけで、想像力と、手を動かす器用さと、期待する楽しみ、自分でつくつたものができる時の喜びというのは大きい。自分で主体的に工夫して遊ぶというのが一番いい。

**当麻** 心が何によつて満たされるのかの問題ですね。ワク



ワク感がなくなつてきましたね。

**奥本** それに、昔はあちこちに鎮守の森があつた。あれは平地にあつた原生林だつたと思うんです。古代から日本人は自然を敬つてきました。大きな木や森に対する畏敬の念も大事だと思ひます。そういう、何ものかに対する畏れの観念は、人の心の奥行きにとつて必要なんです。

## 虫や生きものとふれあえる

### 環境づくりを



**奥本** 街路樹も今は外来種が多いですね。その方が昔からいる地域固有の虫がつきにくくて、管理がしやすい。それに実のつく木はだめだとされているし、小学校にもそういう木を植えない。そこで、このままではいけないと、近所の小学校のご理解をいただき、ちよつとした活動をしています。使つてないプールに水を張り、水性植物をおいておくと、トンボが飛んできてタマゴを生み、赤トンボが2千、3千の単位で出てきました。ギンヤンマもやつてきた。少しのことでそれだけ水性昆虫がかえるんです。

**志波** 学校の先生方が協力してくださるのがいいですね。やはり、子どもが毎日いる場所に生きものがいるのがいい。

**奥本** 3年程前になりますが、お茶の水女子大学のテニスコート脇の歪な形の土地が放置されていたんです。200種ものツバキのほか立派なサクラもあつたんですが、シユロやアオキなど強い種が繁茂して多くの木を枯らしていました。その土地を手入れして、ある財団の助成でミカンを植えたら、アゲハチョウがいっぱい発生しました。都市の中に在来植物が主体の自然環境を復活させて、昔は普通にいた虫を増やしたいですね。この春から大阪芸大に講義に行くのですが、そのキャンパスにも植物を植えるつもりです。二上山が隣にあるのですが、



そこには昔はギフチョウがいたんです。在来の木やスミレ、カタクリ、カンオイを植えたら、ひよつとしたら別の山から飛んでくるのではないか。あの辺りは万葉集に出てくる土地ですから、万葉の自然の片鱗だけでも回復させたいと思っています。学生たちと一緒に、授業の後で蔓草を刈ったり枝を払ったりする。彼らも一度やってみると、それまで見過ごしていたものが見えてくるはずですよ。

日本の自然は、ほんのちよつと手をかけてやると、持続可能な、いい状況になります。逆に、それを放っておくとワーツと溢れだしてくる。問題になっているモウソウチクの繁殖などもその例です。

**志波** NEXT21でも、木の成長力が強くて、苗木で植えても3年くらいで枝が茂ります。そうすると下に光が通らなくなって下草が生えなくなる。伐つてやると光が届くようになって草が生えてくる。少し手を入れてやると、いい状態になりますね。野鳥もやって来ます。

**奥本** それがうまくいったときはうれいすよね。ここは以前は自宅だったのですが、2階の窓を開けたら目の前に樹液が出ている木が生えているようにしたいと思ひ、もう40年以上前になります。母が大坂の貝塚市で拾ったクヌギのドングリを植えたんです。それが3本大きく育ち、今もそのままあります。虫が樹液を目標して飛んで来ます。この木はこの館の神木です。

## 生きることの

## 深いところにつながっていく体験を



**当麻** 実家で米を作っていました、子どもたちが小さい頃、田んぼに子どもたち用の小さいスペースを借り、初夏に一緒に裸足で田んぼに入りました。米は日頃食べているけれど、こんなふうにして作られるん

だよということ。

**奥本** 田んぼに裸足でスルツと入る瞬間は、一種の快感ですよ。昔は水の中にドジョウとかタニシとかがいっぱいいた。近づくと、ドジョウが煙幕をはってパーツと逃げるとか。自分で作ってみると、農業なしがどんなに大変かもわかりますが、農業を減らすと、かなり昆虫は増えますね。田んぼの端の方にもいっぱいいますよ。

**当麻** 家の庭でも無農薬で野菜を作っているのですが、大葉に虫がいつぱい来て穴だらけ。スーパーに行くと、きれいな形のものばかりが並んでいます。

**奥本** モンシロチョウの幼虫などはキャベツやダイコンの葉っぱで育てられるんですが、スーパーで買ったのを食べさせると死んでしまう。昆虫にだけ効く農薬だということですがね。

**当麻** 食についても生物多様性はすべてに関係しますね。生きもののにぎやかな田んぼが、その原点だと思います。大人が努力して子どもたちにそういう場を体験させたり、大人自身も日射しや風のおいを感じたりするほうがいいですね。

**奥本** 子どもの時に、そういうことを感じていると、よろずに敏感になる。都会にいたら忙しくて忘れていても、田舎に帰ると思ひ出すでしょう。最初の体験がないと感覚が育たないという気がします。風上げをしたことがないと、いい風がどんなものがわからない。でも昔に体験していると、上空を吹いている、ちよつどいい風がすぐ見つけられるんですね。

**志波** 親の世代でも、そうした体験が少なくなっているのはやはり心配ですね。

**奥本** ただ、親も一生懸命なんです。この教室でも、ついてきている親の方が面白くなって、子どもを取り上げるようにして自分でやりだす。「お父さん、子どもにやらせなさいよ」と言うこともありますよ(笑)。

**志波** 今の時代、大人も子どもも生活の選択肢が増えてしまつて、その



**奥本大三郎** (おくもと・だいさぶろう)  
フランス文学者、作家、虫の詩人の館館長

1944年大阪府貝塚市出身。東京大学文学部仏文学科卒業、同大学大学院修了。フランス文学研究・教育に携わり、昆虫に関するエッセイなどの著書・翻訳も多い。元埼玉大学教養学部教授、日本昆虫協会会長、NPO日本アンリ・ファーブル会理事長。ジュニア版『ファーブル昆虫記』（集英社・全8巻）に続き、現在『完訳ファーブル昆虫記』（集英社・全10巻・20冊）の翻訳を進めている。その他の著書は、『楽しき熱帯』（集英社、サントリー学芸賞受賞）、『博物学の巨人アンリ・ファーブル』（集英社）ほか多数。

**当麻 潔** (とうま・きよし)  
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 主席研究員

大阪ガス株式会社入社後、供給部門、技術開発部門を経て、(財)エネルギー総合工学研究所に出向。帰社後環境部を経て、現職。研究領域は、環境・エネルギー。

**志波 徹** (しば・とおる)  
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 主席研究員

大阪ガス株式会社入社後、供給部門、商品開発部門、大阪ガスの実験集合住宅NEXT21関連業務などを経て、現職。研究領域は、環境・エネルギー。

**虫の詩人の館 ファーブル昆虫館** (東京都文京区千駄木)

NPO日本アンリ・ファーブル会(奥本大三郎理事長)が管理運営する。地下に、南フランスで生まれたファーブルの家を再現し、展示室と収蔵庫には計10万点以上の標本コレクションを収めている。子どもたちに昆虫への親しみを持たせるイベントなども随時に開催。開館は金～日曜日。入館は無料。



公式ウェブサイト  
<http://www.fabre.jp/>

中で忘れられているものがあるという気がします。忙しくしているけど、ベースのことをやってきていない。子どもも、おもちゃをたくさん持っていて、でもそれで遊んでいる時間は短いですね。すぐ飽きてしまつて。

**奥本** 「オモチャの多様性」で困っている。満腹で幸せすぎて、何をしたいかわからない。どこかで緊張感を持つ瞬間があってもいいのではないかと感じもします。

**当麻** チョウにそっと近づいていって、息をとめて捕まえる一瞬とかがそうですね。

**奥本** 人間にとって、心臓が口から飛び出すほど興奮する瞬間というのは、貴重なんじゃないですかね。昆虫でもいいし、自然や生きものに関わる機会をつくるのが大切ですね。生きものは教師です。

**志波** 小学校でも、それぞれの家庭の中でも、どうすればそういう視点

を入れられるようになるのかを、考えていかなければなりませんね。

**奥本** たとえば、学校や自分の家の前に好きな木を植えて、それぞれに自分の名前をつけると楽しいですね。花の咲く木を植えると虫が来ますし。たとえ枯れることがあっても、それは無駄じゃない。立ち枯れの木にカミキリ虫がつくんですよ。枯れた木もゴミではないんです。

**志波** 生命の循環とか、一度失われてもまた復活してくるものとか、自然と接していると多くのことを感じとれるということですね。

**奥本** 繰り返しになりますが、そういったことを子どもたちの時からうんと見ている方がいい。生きるといふことの深いところにつながっていく体験だと思いますよ。

**当麻** 本当にそう思いますね。今日は楽しくお話をうかがいました。長い時間どうもありがとうございました。

CEL